

学 位 論 文 要 旨

氏 名 大橋 均

題 目 UDLの授業デザインに基づく実践と効果検証

～児童の学習への取り組みと学力の変容～

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本論文は、日本の通常学級における学習者の多様性への対応という喫緊の課題に対し、学びのユニバーサルデザイン（Universal Design for Learning：UDL）を授業改善の理論的基盤として位置づけ、その授業デザインの提案と実践的効果の検証を行ったものである。サラマンカ宣言以降、日本でもインクルーシブ教育の理念が浸透しつつあるが、個別支援中心の従来型の特別支援教育には制度的・実践的限界が指摘されている。また、学力・認知特性・興味・文化的背景などの多様化が進む中、一斉指導型授業では全ての児童が十分に学習に参加することが困難になっている。この状況に対し、UDL は多様な学習者に対応する柔軟な授業デザインを可能にする枠組みとして注目されているが、日本では体系的導入と実証研究がまだ十分行われてはいない。

本研究ではUDL の理論に基づく授業デザインを構築し、その効果を3つの研究で検証した。

第1の研究では、小学校4年生を対象に7か月間の UDL 実践を行い、学習への取り組みと学力の変容を量的に分析した。算数に関するアンケートでは、UDL 実践群において複数項目で有意な向上が見られ、特に援助要請行動や学習への自信に関する項目で改善が確認された。一方、学力面では短期的に限られた範囲の知識・技能を獲得させる効果が一定程度認められた。

第2の研究では、児童の「振り返り」の自由記述を質的に分析し、UDL 実践が児童の内面的変容にどのように寄与したかを検討した。その結果、児童は「できたこと」中心の評価から「できない部分の認識」へと視点を広げ、学習方法の選択や切り替え、教師の助言の活用、他教科や生活場面への転移など、自己調整学習の側面が強まっていることが示唆された。これらは UDL が目指す「学びのエキスパート」に近づく姿への変容であり、量的指標では捉えにくい重要な効果であることが示された。

第3の研究では、小学校5年生120名を対象に、1年間の UDL 実践が標準化された学力テストに及ぼす影響を検証した。UDL クライテリアに沿って授業デザインを明確化し、視写負担の軽減、学習方法の選択制、ゴールの明示と振り返りの導入などを体系的に実施した。その

結果、標準学力テストにおいて、UDL 実践群は学力の維持・向上が見られ、特に学力下位層の得点低下が抑制される傾向が確認された。これは、UDL が多様な学習者に対して学習アクセスを保障し、長期的な学力形成に寄与する可能性を示すものである。

以上の3つの研究を総合すると、UDL に基づく授業デザインは、児童の学習への取り組みを改善し、自己調整学習を促進し、長期的には学力の維持・向上に寄与しうることが示唆された。また、UDL の実践には、伴走者による継続的支援、学校組織としての取り組み、授業設計・実践・省察・再設計の循環構造が重要であることも示された。本研究は、日本の通常学級における UDL 実践の体系化と実証的検証に貢献し、インクルーシブ教育の理念を授業レベルで具体化するための知見を提供する可能性を示唆した。